

088082-000-6

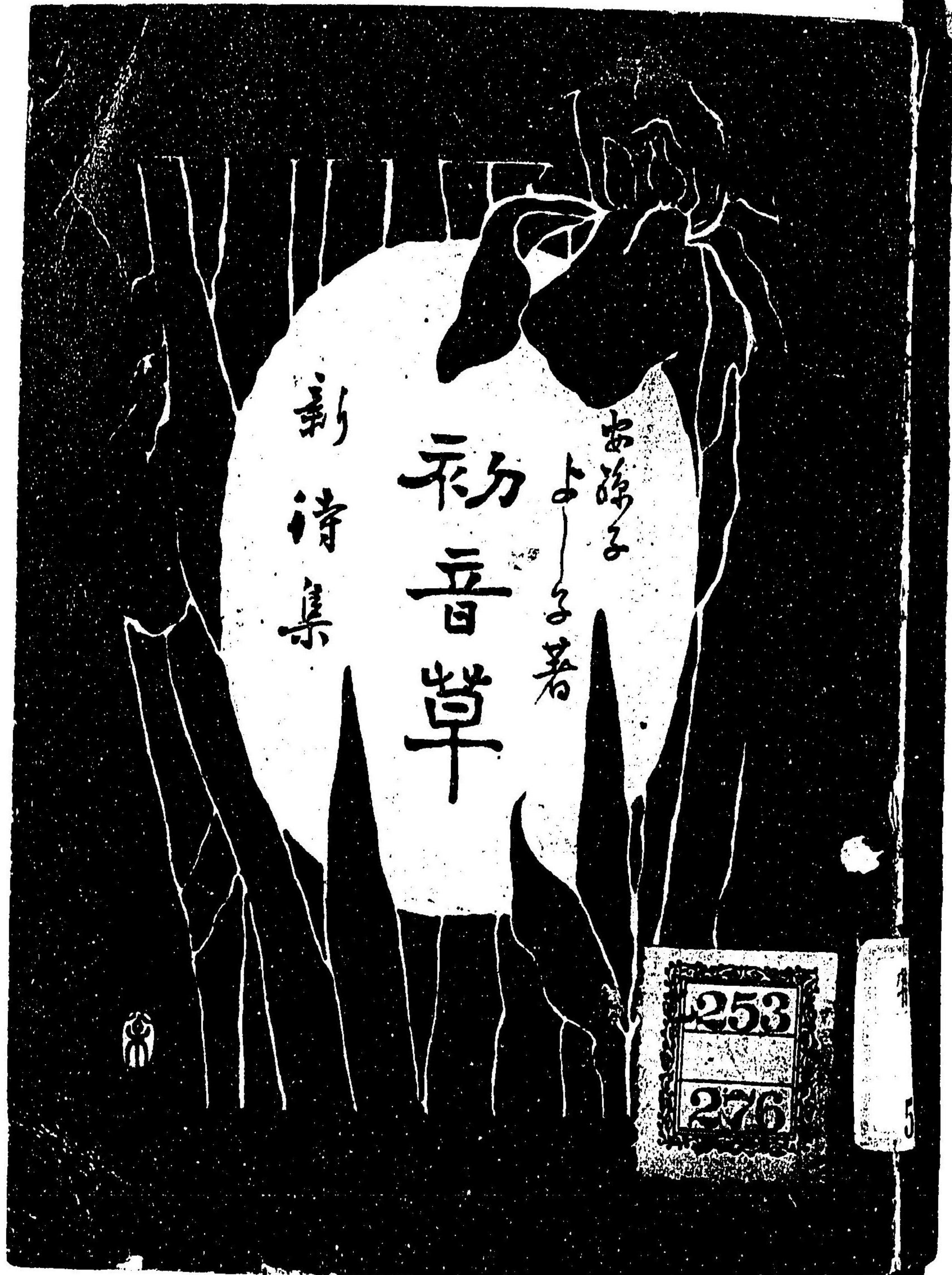
特63-578

初音草

安孫子 美子 / 著

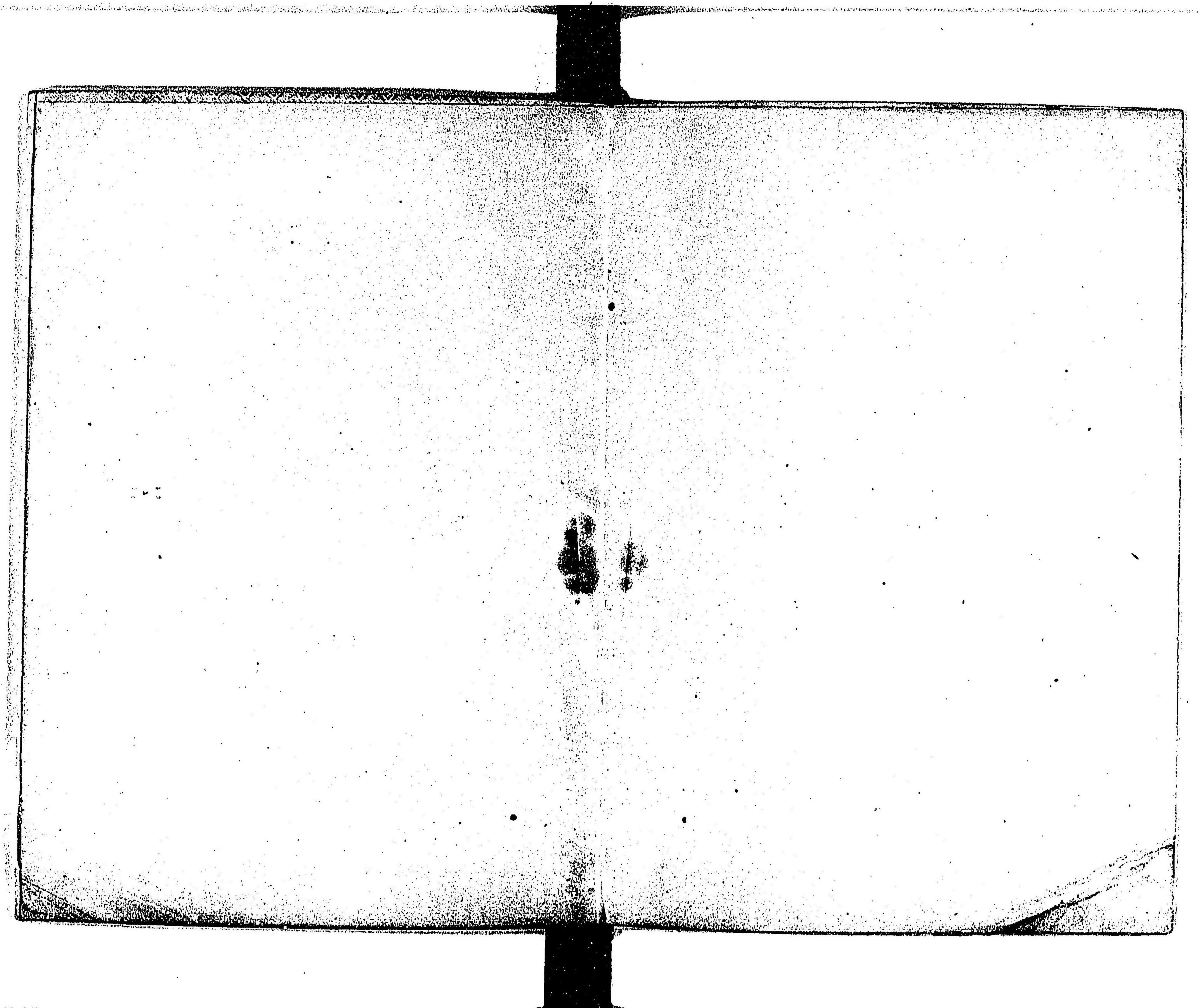
M39

DBG-0179



253  
276

5



特63

578

詩集  
初

音

草

安藤好美子女史著

金華堂藏版

明治  
39 10 24  
内交

名なし野の、名なし小草、名付けて初  
音草と云ふ、十九の春を歌ひ出でし此  
初音草、摘む人あらば願くは、花も實  
も無きあはれを見給ひて、其柔胸にふ  
れさせ給へ、  
やがては花も咲きいでんかし

美子しるす

.....[ 1 ].....

目次

西行法師	.....	一
濃紫	.....	五
冬の夜	.....	十三
夕雲	.....	十五
遊命怨	.....	二十五
男裝	.....	二十七
細腰乱舞	.....	三十三
小草	.....	三十五

古精舎.....	四十一
のしり.....	四十五
西郷南州の像の下にて.....	五十三
すいろ.....	五十七
魔の池.....	六十七
秋の聲.....	七十一
若き鐘樓守.....	七十七
雨　　夜.....	八十一
千曲江頭に立ちて.....	八十九

染　　衣.....	九十三
秋　　風.....	九十九
はなぐし.....	百〇三
聖　　壇.....	百〇七
ゆ　　め.....	百〇九
あこがれ.....	百十三
ハルピンの露.....	百十九
うれひ.....	百二十三
は　　つ　　秋.....	百二十九

……〔 4 〕……

深林	……百三十三
御名	……百三十七
舞殿	……百四十三
ろの人	……百四十七
太平洋の春	……百五十三
ちる花	……百五十七
街頭の小枯	……百六十五
職友	……百六十九
野の友	……百八十一

……〔 5 〕……

姉のさゝろ	……(短編小説)……百九十五
後半生	……(短編小説)……二百〇一
辭郷の賦	……二百〇九
女詩人	……(短編小説)……二百十三
女箱	……(短編小説)……二百二十七
駒の蹄	……(短編小説)……二百三十六

目次完

はの音草

西行法師

冠するあらは雨つに裂いて

三尺無反の剣に血ぬらし

龍顔遠き階下に額づひて

過る長袖を睥睨する

身は是北面の大丈夫

美

子



……( 2 )……

春宵甲を叩いて散る花一片  
有聲無聲すべて意味  
嗟大慈なる正覺の佛陀が  
凋落の啓示胸に泌むを  
奚ぞ我れ生死の謎を解き得ざる。  
可憐の寢顔に面を背けて  
蕭々去る明滅の漿下  
堪えじな小さき父呼ぶ聲！

……( 3 )……

双脚につと蹴つて廊に出づれば  
風落寞として雲大寂。  
六合の物象我に於て『空』なるを  
胡ぞ發念の前にわが子あらむや  
是より圓頂の一沙門  
行雲流水に人生を笑つて  
『死なん哉花の下にて願くは……』

……( 4 )……

(れがはくは花の下にて我れ死なん

その衣更月の望月のころ)

四行法師

……( 5 )……

濃紫

失せし子が濃き紫の染小袖盆を七度寺院に  
古りたる

何んとなく双の蝶を野に追ふて並みて笑み  
しを罪とし云ふや

おん肩を小さき袂にそと打ちて姉様振に『春  
雄』と呼ばむか

なんなれば我を石よと人の呼ぶよみがへら  
すも息吹のちから

……(6)……

櫻散る夕べを鐘に送り果てぬ行く雲百里友  
やうなだれむ  
醉ひくつて小雨を唄に歸る人李白に似ると  
影追ひて見ぬ  
野の百合花に銀河二千里影絶へて夫れ天地  
の戀誦さしむる  
あはたしく九旬の夏を肩の瘦せし春より  
人と興なき世帯

……(7)……

緋牡丹に小雨けぶれる春の日を佗居の夢の  
花にゆらく  
ひれ伏してみ脚に悔ひん罪の子か堂に高う  
見る像聖ポロ  
花を歌に花の下ゆく君を繪に筆とらば如何  
に白梅月夜  
秋七度枯れては咲きぬ小百合ばな御墓めぐ  
れる美しき扉や

何此まゝ朽ちむ運命の二人なるにあまりに  
惜しき戀のほよりよ

高う誦する若僧正が法華經にほろりまぼれ  
し御堂の紅蓮

神に得しと今か野を吹く草笛に舞はむ入興  
の虫が白拍子  
傘の中を亂れて重き君が息髪に氷りて露し  
たゝりぬ

詩に會せず畫堂に古りし御像やわびて仰ぐ  
に露帯びし眉

匂ひ清ふ神大御衣雲に引きて天降り給ふか  
野を白き虹霓

京の子が祇園へたどる春の夕繪日傘あゝめ  
花散りかゝる

胸に抱くにさても冷たき夏花の又燃ゆと見  
る我や狂ひの子

あゝの岸に生ひてし磯菜浪に投げて佐渡に  
 十九の人泣かしめむ  
 音もなく枕に落ちし鬢の小櫛あゝさびしら  
 を人の名呼びぬ  
 さびしみを巨塔の影にひそませてウオータ  
 ーローの秋の陽榮ゆる  
 口輕の翁客呼ぶ聲もあく酒屋の夕べ秋雨の  
 ふる

さびしうも壁にはふ日を床に見つゝ藁打つ  
 母の唄をほへしよ  
 神が斧に削らせましゝ淵の岩水音寒く白藤  
 の散る  
 「忘れねば思ひ出さずと」薄う見る文に泣く  
 べき夜の旅館  
 讃ずるに小さかり人の天地を神が御座に足  
 るべきものか

夜毎月の虫と笑みます萩の戸に堪はら薄れ  
し人の名我が名

白蓮びやくれんに毒ある紅べにをそとさしぬ戀は神業魂わきたまの  
ゆらぎや

冬の夜

ちさき灯ともしをかいたてゝ  
夜の化粧けいざうの箱はことれば  
闇冷やみひやたうも流ながれよる  
花はなのやうなる紅脂べにの香かや。

振ふるひをかき手に溶とくを  
微笑ほほえみまして扉との影かげに  
『あら美し』と君が仰言のり

女子十九を消ゆ思ひ。

何を嫉みの木枯の

荒べるまゝに夜は更けぬ

夢ぬくもりの天地に

解くる二人の息吹哉。

夕雲

雲を生む王者と崇き巖を斜め雨過ぎて行く  
大ナイヤガラ

江の月のをぼろを落ちし雁の行衛二十五絃  
の一手も欲しな

聖堂の鐘に更け行く楡の村今宵小さき豫言  
者生るゝ

夕雲や六十三里須磨寺の鐘の音長う秋のせ  
て来ぬ

わびて立つに待人來ずの辻の宵低き雨雲鐘  
あはただし

佐渡へ行く般乗り合ひの人二人信濃訛のす  
いろ胸に泌む

登り行く鐘樓五段詩に似て撞かぬにすゞろ

山茶花散りぬ

傘を斜め君にさしかけ袂とりて片袖ぬれし

春の夜の雨

春の樓を月に眠れる京の子が紅の枕に花吹  
雪する

音もなく水に落ちたる白つばきなやみや人  
のまだ運命解かぬ

ちぎれとぶ夕べの雲に君をのせて戀を求む  
る神酔はさばや

戀を其まゝ詩を其まゝ袖にして秋を舞はむ  
の子がみだれ髪



くすし待ちて星落つる夜を扉に立てば背な  
 る三つの子「玉ヤ」呼びぬ  
 唯三人棺守り行く影見えて草絶へし野を夕  
 べこがらし  
 ともすれば又も相見る此赤細冷えし石にも  
 戀なからずや  
 と思へどあまりに冷えし人の情夢と知れな  
 の其みさとしか

乙女呼ぶ大蛇が淵の波の上に美しくし犠牲の  
 うつし繪投げぬ  
 白布絹に鳥田の影のにじみ見ぬ人よ夕べの  
 とは云はせじ  
 匂ひの魂泣きて沈みし池のほとり湛ゆる水  
 に夕榮青き  
 冷やし〜仇し女が柔肌にふとふれませな  
 血なき君がみ手

かへり来て荒れし軒葉にたゞめば風身に  
しみて母は在さず  
君がみ詩あまりにやさしくかはあれど頼ま  
じ酔はじわれ男こゝろ  
恐ろしきミレージュの影今消えて千里の沙漠  
たゞ風の聲  
すぐる子が甘き生命の野の古井入りし十九  
の魂迷はする

あふぎては月に泣く夜を雁とびて又俯きて  
故里ねもふ  
絃は断ちぬのゑるをのゝき燃ゆる血に傳ふ  
は指の小さきく耻  
をばしまに破れし小琴をかい抱き秋や無調  
の君戀ふる曲  
鍬を劔に代へて起たむの郷の夕見よ西の空  
雲驅けり行く

君がうきじに捲かむ柔手のをのゝきを紅の  
 たもとに小さくひめぬる  
 天地に只二人なる君とわが戀の運命を神を  
 としめな  
 天地を神彩らす少女なり秀才ふれては襟正  
 しませ  
 花はちりぬ星またゝきぬ春の宵無言のちぎ  
 り美しと見ぬ

君と寝ぬ明けぬ厨に手鍋さげて九尺の小舎  
 に思ふ事もあらず  
 堪へじく門流し行く唄聲に彼の子よく似  
 し三年あゝの夕べ  
 夢とそは消えぬ三年の君が戀我に一人の人  
 のねん姿  
 花に酔ふて戀のうらぶれ二十の子美はし筆  
 眉の夏に瘦せたる

暗の夕を香なき白梅そと抱きて誰に告ぐべ  
 き胸なるれもひ  
 笑み買ふべく匂はうすき亂れがみ小櫛とる  
 手の何求むべき  
 閨にひとり誰の名よばむ力なしもだへあ  
 まし世をねむらむか  
 白百合の小さきに足らぬ柔肌の血なきつる  
 ぎに君屠るべく

薄命怨 (肺病む少女)

なんぞ醜き骨掩ふど 形骸に絡む繪摸様や  
 衣輕かかの飾装も 彩なきうれと誰か知る。

神たはぶれの鞭あげて 少女の胸をつと打てば  
 いたましい哉血は涸れて 吁、『薄命』の痕止めし。

春若やぎのまなざしに 都に白雲を趁ひし子の  
 運命の前あくづ折れて 傷手をなほもかき鬚る。

よし、つらく共事秘めて  
君あざむくに得堪へじを  
「地なる花」よと暮ひます  
御手を拂ひて世を泣む。

油つき行く有明燈に  
面を背けて悲しめば  
音なく断れし元結の  
頬に落ちかゝる亂れ髪。

男 装

巳みあむ哉世をのゝしるに此子足らむ君晩  
春の酒もよからせや

「さあり世は」と濕める火影につと背きて意  
氣に起ちし子二十一の秋

なんすれぞ磨劍の男子血にたゝせ東亞六億  
詩に眠れる

嵯峨へ迎る白梅月夜ほろ酔ひてまろび寝の  
人西行に似たり

君と行く遠き南洋の島守よ二人踏むべき永  
劫の天地  
しばし榮て消ゆる大野の夕榮に名追ふ子よ  
はき力をわびぬ  
魔ともならむ神ともならん乙女の身御空に  
吐かむあゝ胸の血潮  
形して全かるべき人の子が胸抉ぐらむか炎  
ぞもゆる

腰にとかむ三尺の秋水よしなく共詩筆一枝  
萬馬を驅らむ  
魔多き世に君安かれな乙女なれど小さき腕  
にも征矢を射ん怒  
暗に消ゆる來ん世過ぎし世人ののぞみ秋を  
誦せあのおの「魔弦吟」  
自由を呼びて自由に活きむわが胸や神革命  
に世に降らせな

得べくんば三年を石の像たらばや見よ口唇  
に戀の炎あき

神よそはやさし少女のねぎ言と劍持つ子の  
詩誦し給へ

血ぞ滴る魔の手に書かむ咀呪の詩天にあほ  
見る戀なからづや

酔ふてこゝに壯士夜を舞ふ酒の欄断琴音な  
しあゝ正氣の詩

世に逆きて路に詩説く瘦せし子の楚歌に誇  
りの血は高う鳴る

わが世永劫に榮光の冠を地にすてゝ求めむ  
天の其大御座

郷を去りてかゝる峠路鐘暮れぬあゝ二十年  
や檜笠の重き



細腰亂舞 (慷慨の女子)

細腰亂舞二尺の脚に

波濤を蹴つて睥睨すれば

肝、胡爲乎極北の天

アライト既に紅血を見る

危機は迫れり長袖断ちて

我れ又佩かむ『斬馬の劔』。

生きて妖妓の膝に眠るもの



死して屍を馬草につゝむと

言たり丈夫此壯語？

をかしからずや咄此語

義憤に燃ゆる眼に眞あらば

請看よ男子あゝこの秋。

小草

北の野にしほみて枯れし小草なりあゝ唯か  
くて運命を強いな

強ひまそな君東とや西ぞよき露うつくしの  
百合葉を落ちぬ

夕の鐘を雨ぞ追ひ來る水一里江村今し詩に  
昏れて行く

花の香に人なつかしき夕の扉や眉あげて見  
る北七十里

ほろ酔よめの詩吟しぎんに歸かへる櫻月夜うづもつきよ悲調ひぢやう添そへては花  
白しろう散ちる

一夜ひとよ星ほしの地ちにくだると夢ゆめに見みてふと咲さきい  
でし秋あき白しろ芙蓉ふよう

君きみはまさで今年ことしも赤あかき柿かき紅葉もみぢすゝろに堪たへ  
ぬ我われがおもひかな

媪おきな守まもる辻つぎ行ゆき燈とうの雨あめに消きへて鐘かねの音ね重おもく暗くらを  
めぐれる

大寂おほびに入りて太古たいくに似にたる黄く昏れの堂どう胸むねひそ  
やかに世よをうたがひぬ

あもるべくいづく生命いのちの宮殿みやでんありや戀こひは少すく  
女のおんな小ちさき天地あめつち

有情うけもち無情むじやう花野はなに立たたす經きやうの人ひとつゝむに春はるの  
血ちは若わかき眉まゆ

神かみを説ときて聖者せいしやあもりしベテレベテレヘムヘムの古堂こどう  
の壁かべに西詩さいし高たかう見みる

駿馬の骨を買ふべき人も來ぬ清女が家の權  
花ちる夕

白壁にうすう残りし鬚の形こゝに倚りては  
いく日を泣きし

江を三里下る舟唄京訛りみだれは戀のあゝ  
優さ男

鎮めませたぎる熱き血しづめませな冷やし  
まつらむ我に泣きませ

寂しちに悶ねて春の夢は成らず血なき小枕  
かつ夜の長き

橋の上を白衣たゞむ雨の夕鬼と見て人さ  
てれどろきぬ

お花今宵装ひこちたき揚島田宮の大森盆祭  
の唄よき

木の葉散りて行く人影の地に落ちてそれよ  
深冬のあゝ我にさびし

君を泣きて愁ひに瘦せしやせし子が鬢のほ  
つれに世を呪はむか  
さすらひて三年ふりにし詩人の扉や今宵も  
きこゆ「離騒」の悲曲

古精舎

三百年の「春」を「夢」を

大天地に葬りて

杖立て、見る古精舎の

寂黙いと、凄<sup>すさ</sup>い哉。

誰ぞや藝術の鑿<sup>のみ</sup>の手は？

双樹の花の浮彫<sup>うきぼり</sup>を

斜<sup>なぐめ</sup>にかけしさがにの

何を彩る糸子とや！

七段高き聖壇に

御衣眩ゆき紫色の

人、瞑想に額垂れて

「涅槃」を説きし跡いつく。

散るべきものと花は落ち

常ききものと人は逝く

祇園精舎の鐘朽ちて

物活動の影色絶へぬ。

胸に泌み入る苔の香に

背きて仰ぐ鐘樓の

断れし小細になほ見ゆる

姿影孤寂しき若者が！

戀に漂零れ世を遠み

幸福にはぐれて鐘撞きて

夕べを泣きしをもかげを

かき消さむには我れよはき。

のゝしり

詩の才は世に容れられず幸は足る笑みて天  
地我が行くところ

毒の矢に色を求むる男の子刺して斯くても  
悔ひぬ血を啜らむ哉

罪の子なり怒りの鞭よ呼ばせ給へ脚なる紐  
を結ぶに足らじと

冷扉あけて命よと入らむおの子とや醒むる  
よ立たす死の大御神

百合花に見る榮美くしき神がみ手なにソロ  
 モンの春にふるゝべき  
 自由の世にそれよ罪の子しひたげてなほさ  
 ぼたんかこの伏魔殿  
 許しませなわれや小さき子紅の袖肩あげ糸  
 のまだとり取へぬ  
 さだめ盡きて暗に消へ行く秀才の魂名なき  
 野の花そは似たらずや

眞紅もゆる夏の威に伏す野の草のたま〜  
 似るよわれを戀ふ人に  
 地なる星を胸にひめむの人の子がとはに泣  
 くべき花か月草  
 毒にのらす其くちびるに眞ありや地ある男  
 の子を神こふしませ  
 四十年を若きに笑みぬめしひの子あゝ秋の  
 風うた聲細き

罪を悔ひて君が墓守る我ふとも知らで無情  
 の世と泣きますすう  
 狂ひてはつばさ二千里空を掩ふて炎のまみ  
 に人あらすべく  
 墮ちくゝて東亞このまゝ夢に入る血に説く  
 一人男子なからめや  
 理想捨てし歸りなむいざ母います春やむか  
 しの故里の空

白百合を君にさしげんに力なしそれよ薔花  
 の色濃きはくゝに  
 酒を瓶に柔手うなむにそと捲きて酔ふては  
 戀の血も交るべし  
 とは云へど若き血は野の百合に見る抱か  
 きの子何やみぬべき  
 注がむに價値なきもの其涙君が命とやつめ  
 たきむくろ

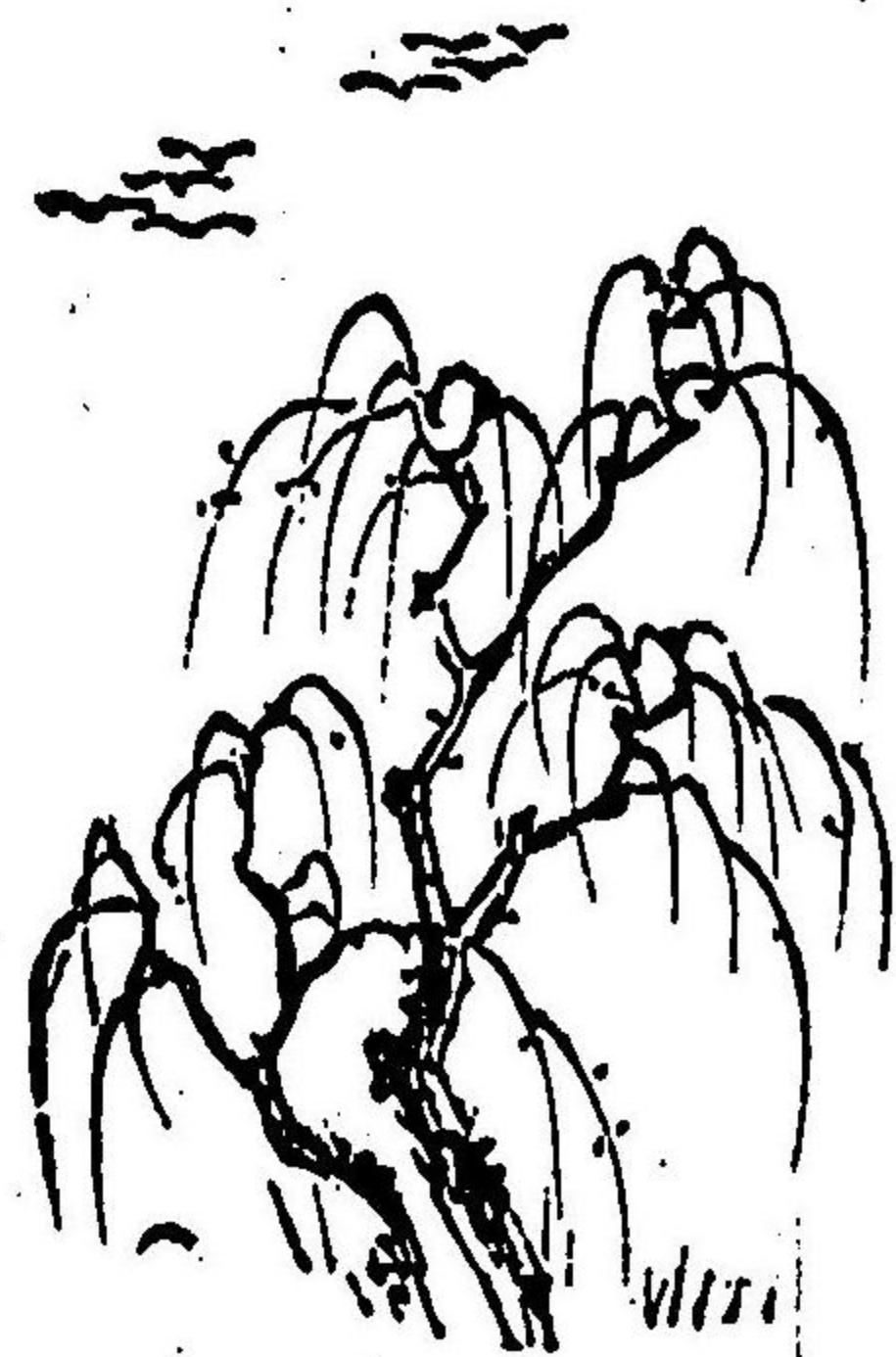


血ぞもゆる十の小指せうしゆのをのゝきに君醉しひま  
する罪あらざれな

君見みずや大海原たはうなばらに雲ぞ湧わく若わかき廿年はたちをわれ  
劔つるぎの子

呪のろひ了まへて空そらに吐はく息いきの血ちと凝こる夜よ北斗ほくとゆ  
らぎて黒百合折くろひやくれぬ  
人ひとの子こによりて立つべき柔腕やわうでう詩うたなる才さいに  
みちひとり行いかむ

ねほひなる地斬馬ぢせんばの劔けんを手に持ちてをかし  
からずや男子おとこなる戀



西郷南州の像の下にて

西方に驅け行く日輪の  
余韻幽かにたそがれて  
人間と魔神と呼ぶ地の暗黒を  
吁、崇高の君が銅像。

夜風斜に花吹けば  
微笑すか偉人隣なきに

讀殘の書投げ捨て、  
われ現君と茲に見る。

問はむ英姿の不死の靈

活眼既に鎖せりや

見よ韓山の雲の色！

豫言は遂に空ならず

聞け蓋世の其壯語

我事茲に了はんぬと  
笑つて去りし西海の  
山河青みて又起たず

偉業は高き丘の上

我れ唯知らずひれ伏せば

松籟髪に冷かに

噫莞爾たり君が像

す  
い  
ろ

すいろうわが泣<sup>な</sup>きても見<sup>み</sup>たき夕べなりき人わ  
すれじよ千駄が谷の秋<sup>あき</sup>

かたつむり鐘に時雨<sup>しぐ</sup>れて樓<sup>ろう</sup>下<sup>くだ</sup>る僧<sup>そう</sup>の背<sup>せ</sup>寒<sup>さむ</sup>く  
行く夕<sup>ゆふ</sup>あらし

裂<sup>さ</sup>かばいかに血潮<sup>ちほ</sup>や燃<sup>も</sup>ゆる柔肌<sup>じゆ</sup>にふれしと  
罪<sup>つみ</sup>か野百合<sup>のひやくりく</sup>の白<sup>しろ</sup>き

絶<sup>た</sup>へてつづく馬<sup>うま</sup>士の鄙歌<sup>びんか</sup>霧<sup>きり</sup>に消<sup>き</sup>えて江<sup>かう</sup>を斜<sup>しや</sup>  
に青嵐<sup>せいらん</sup>ふく

額垂れて夕べ汀に人泣かば詩聖たらずや秋  
ライシ河  
紅脂買ふて質屋が門にうなだれし女瘦せた  
る京の夜の春  
女神のりて氷の上行く蓮葉舟御座をかして  
花ちりかゝる  
一葉ふたば鐘樓斜め散る見へて繪のごとけ  
ぶる夕月の寺

緋傘かざす紫衣のみ袖のたそがれて堂の階  
段春雨細き  
夏を九十郷を西して大岐蘇に檜笠負ひし子  
あはれと見ませ  
神天降りて醒めよの鞭の人の手にふれしあ  
けぼの愁ひの長き  
秋雨の小椽淡れて日は暮れぬ瘦せてこのま  
へ雲に舞はイヤ

ふとさめて抱かむ人の柔肌をさびし枕にそ  
と撫てゝ見る

云はむねもひ得云はむねもひ人の思細りし  
肩よ見ませぬの秋

血に泣きて人の玉章血に裂く夜ほろゝ散り  
たる白桃の花

夕の鐘を額におぼゆる時雨道傘のねのゝき  
血にねどろきぬ

媚びてまほる白百合の露魔性深き小裾に蹴  
りて路に酔ひざれ

小走りに京の朝を行く人の緋絹裳裾の粹の  
姿よ

せめそはど詩問ひまつるをばしまに人のま  
ぶたよ涙は欲しき

刻み終へしみ像枕にそと据へて佛師一人が  
長夜を語る

佛堂の雨の半日世を泣きぬ尼が追想の二十  
三乃春

凱旋ませし君よと抱くに夢さめて枕に細き  
細き西の風

燃へてなれし此血二人の神聖ふ呼ばむを天  
のそれと許さぬ

人間おらせと女神織らせし薄衣にそと掩ふ  
血肌ろの手ふるへべく

秋雨にみ堂の小椽人もなく黄菊とぼれて晝  
静かなり

花をらして我とはぢぬる宵戸月なにを血の  
子の天地妬たき

一ふしにすいろ詩口しめり來て興にはぐる  
夕雨小窓

神秘むる彩ある帳そと蹴りて酔はす若姫み  
手とりまつる

聖を呼びて神が大皇子あもらすを下界に酔  
ふ子のみ袖かつがばや

秋野行くに詩味なき姉の袖引きて見ませと  
指しぬ彩もなき石

名に育ひし秀才夕べを戸によりて鐘の行衛  
にれるひをのせぬ

魂は小さき紅連に神がみ手ふれて天行くど  
見る水のあけぼの

野に榮へて紡がざる花眞白ゆりまな子と神  
のみ手に飾ります

夕野小さく萩を流れし笛の音や秋海原に湖  
きくがごと





魔の池

雌<sup>め</sup>蕪<sup>しよ</sup>に毒<sup>どく</sup>を合<sup>あ</sup>ませ  
汀<sup>みづは</sup>にも<sup>ほ</sup>し紅<sup>べに</sup>百<sup>ひゃく</sup>合<sup>あ</sup>花<sup>け</sup>の  
色<sup>いろ</sup>には<sup>か</sup>驅<sup>か</sup>ける鳥<sup>とり</sup>を止<sup>と</sup>め  
香<sup>か</sup>には<sup>か</sup>野<sup>の</sup>を行<sup>い</sup>く蝶<sup>てつ</sup>を呼<sup>よ</sup>ぶ。

あまりに<sup>は</sup>美<sup>み</sup>き姿<sup>か</sup>影<sup>かげ</sup>なれば  
ほの紫<sup>むらさき</sup>の夕<sup>ゆふ</sup>闇<sup>あみ</sup>を

「ねさよ」浴衣の裾輕う  
逍遙すゝろの池の端。

魂ゆらくと手は觸れて  
吁と！引く花の莖は絶へ  
はらりくづれて暗の間を  
なゝめに走る玉水沫。

ふたゝび淵は笑み返り

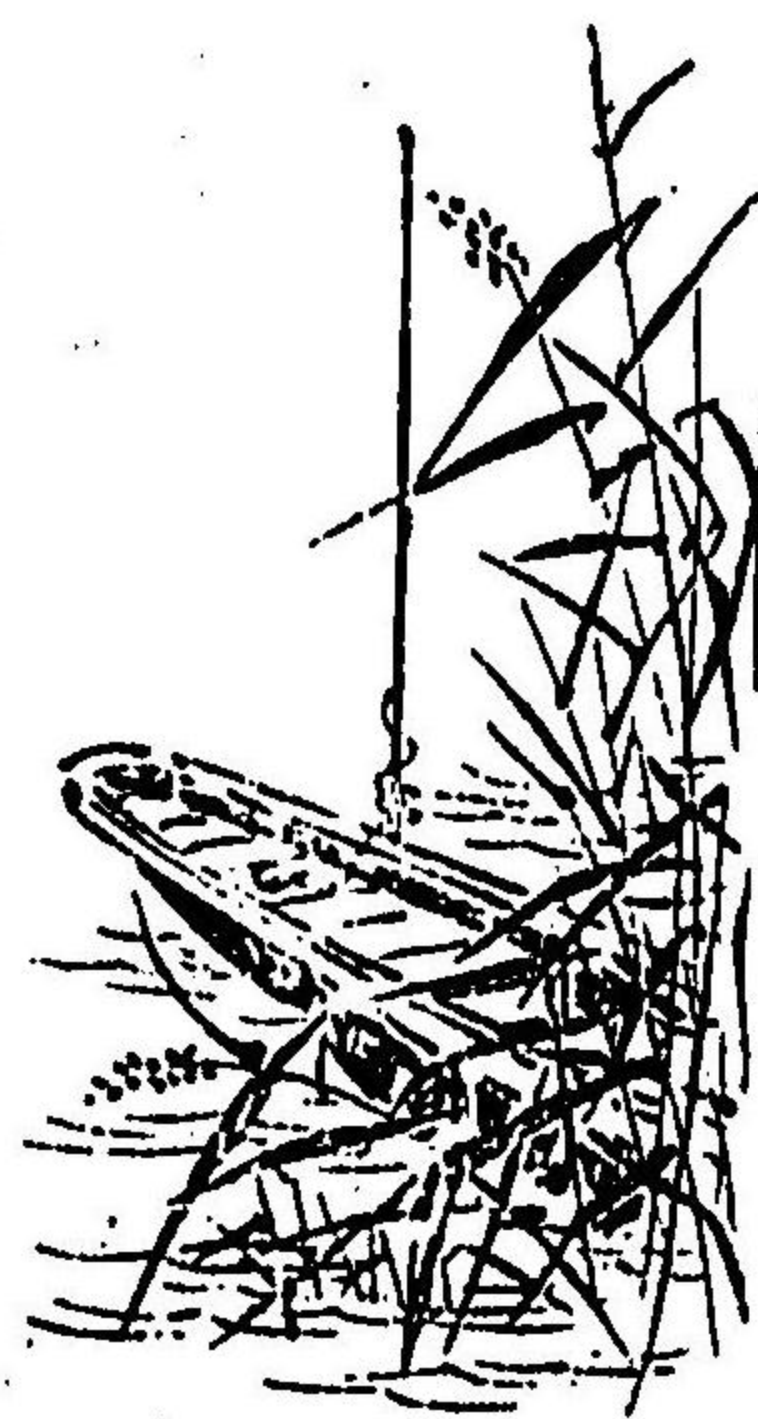
水物言はず花告げず

「秘密」の深くとざゝれて

小波渡る風の叫聲

『美はしき餌は來らずや

匂ひの柔肌を得てまし』と.....



秋の聲

秋の聲を低き枕に聞くゆよ夕水のをばしま白萩  
のちる

詩は無しと土つちをば蹴りて京をいでぬうす碓氷を  
北に秋三十里

夢はなほ繰りし糸車いとぐるまをめぐる夜を芭蕉さき  
行く風のさびしき

ちりて行く遼東の野の血潮見よと紅葉まき  
あむ文に泣くかな

萩の夕ゆふを旅にうれひて君行くと小露白つゆ  
ゆすりても見し

すいろ小さく人の名呼なびて花投なげぬ暗やみのせ  
て行く野のはぐれ水

西の京をいくつ春秋草の戸に戀こもなき身の  
詩うたに瘦うせぬる

詩うた笛ふえに廻廊まわらやう通とふ五位の君紅べにの花はなちる北女御きたにようぎ  
の寮

夜毎人の笑みえては溶ときし京紅きやうべにのかけし小皿こざら  
になくきりくす

天あまなる星ほしぬかにあぼる、秋の宵俯よして野百のひ  
合あひの笑えまひに酔よひぬ

残壘ざんらいの百尺ひゃくせきまばら草枯くれて夕ゆふべ亡國むらうこくの秋あきあ  
ふぎ見る

あゝ逝しく秋地あきぢのさびしみの胸むねに堪たぬ朽くち  
葉は抱かきて燭しよくに泣なかばや

よりて侘びて今宵も泣かむ薄倅子椽の柱に  
身ぞ細り行く  
時雨細く仁王の像にけぶり絶へて峯の大寺  
日は斜なり  
里余を西へ蝶を追ひ来て日は暮れぬ詩の秋  
の野みな神の領  
秋の野を小草に聞きし神の聲人の子露よ唯  
消へて行け

人其まゝ六戸の小村秋暮れぬお花米搗く聲  
若やけき  
秋雨や人のみ肩の瘦せやうにうつむきがち  
の京なるひと夜  
いく夜よりて戀をもだぬし草の戸に秋を笑  
む花眞紅にもへぬ  
青苔に十九の夢をこもらせて眠り給ふかを  
くつきどある

玉や散らむ風な吹きそと野に立てば消ゆる  
運命と露黙し行く

御欄もるゝ簫の音幽か糸のごと雨しめやか  
に秋の日くれぬ

思ひあれば秋の夕べを誦經の時母逝きにし  
の飛電はゆめか

鐘に刻む聖經七文字苔ふりて塔めぐる五百  
年の秋

若き鐘樓守

眠げに見ゆる春の宵

登る七段鐘樓に

そと息吐きて細とれば

大天地のさびしらを

冷たく迫る夜の氣や

聖鐘に刻む五つ文字

その一節の「普門品」

..... (79) .....

追憶の夢を今消して  
残れる二つ眉閉ぢて  
力をこめし一杵に  
震ひて崇き夜の暗。

..... (78) .....

罪業の亡びと音に誦して  
更け行く丑時を高く撞く。  
三年をこゝに漂浪れて  
榮光なき青春の二十一  
温き血潮の胸なれば  
許せ一夜の音の亂れ。  
噫、行く雲に散る花に



雨夜

なんとなく詩うたによろしき雨の夜を無興か歌か  
仙筆せんぴつとりまさぬ

人去らせて夕べの窓によりし髪かみやくづ  
れて雲七百里

灯あかりは赤あかう聖前みまへの花にゆれゆれて教説きょうせつく人ル  
イテルいに似にたり

媮説おぼせつく江戸物語ふと絶たえて夜の雨しづか牡  
丹まくづるゝ



鐘を追ふて夕野細道夢に行くに音にはぐれ  
て物思はしき

西の國に君さすらひの七年を藍かりにしや  
ペピロンの水

君と行く二十萬年求めざれ夢花七日戀語ら  
ばや

火影淡き遊女が部屋へやの壁に高う襟正します  
孔夫子のみ像

夕雨にあもひ得知らぬ山の宿大寂をふくみ  
て秋の氣せまる

何すどや蝶まどひ入る小菽窓遺稿の上に片  
羽くづれぬ

三年夕を泣きてはよりし石の塔うすれし鬚  
にはふきりくす

蜘蛛の糸に笑みて人待つ夕の欄亂れし髮に  
花ちりかゝる

雨けぶる川添一里たそがれて相合傘の人う  
すれ行く

魔どや君が戀ののしりさてつらきみ筆の  
とがと悔あらせ給へ

壁に瘦する花なき秋の影になきて三年夕べ  
を夢ふとさめぬ

笑みて人のいかなくなりし春の日や花落つ  
る音の鐘にももりたる

君思へばどわに安かる胸の血や名なしこの  
花我に似たる花

駒立て、黒龍の水に我れ泣けば屠りし魂か  
闇に聲あり

逝きし兄を人のみ胸にそれと見ぬ許せかひ  
なの夜やうつしなき

うたて今宵胡地の小草に風泣きて大寂に入  
らむの三千の靈

世を笑みて沙門<sup>しやもん</sup>逝きにし此春を精舎<sup>せうじや</sup>の軒の  
花うつくしき

春の夜や窓に聲ある細き雨絶へてはせまる  
あゝの「古宵吟<sup>こせうぎん</sup>」

御堂<sup>みだう</sup>や眠げの經の音絶へて羅漢<sup>らかん</sup>の像に春の  
雨降る

ほゝ笑みて断ちし黒髪<sup>くろかみ</sup>欄に抱き眠らせませ  
と雲あふぎ見る

長きく夢を説く人夢追ひて佗<sup>た</sup>びにけらず  
や造化<sup>かみ</sup>の大前<sup>おほいまへ</sup>



千曲江頭に立ちて

見よ大江の五十餘里  
 銀蛇の眠り静徐にて  
 無象の炎収めては  
 濤聲の音もなし  
 噫、偉あるかな曲水の  
 浩浩の流いつ盡きむ

其一 車抛び見て  
詩人の感想極まらず

あゝ此流、曲水の  
末、黄海につらされる！

其一 車抛び見て  
佳人の思想窮まらず。

聖量の詩人眉閉ぢて

地の莊嚴を思ふ時  
薄命の佳人涙に俯して  
身と行く水の終末想ふ。

聞け其絶叫、その怨憤  
讚美と懊惱のあるところ  
今天驅ける想像の  
大翼は暗を掩ひ行く。



染衣

雨雲あまぐもの江かの北行く夕ゆふの欄らん裂さきて投なげばや戀染こゝろ  
衣ころも

せまる香かにふと戸かどをいでし若葉わがは月夜つきよ袂たもと引く  
人誰ひとたれにか似にたる

春はるや二千野にせんに呼よぶ人の聲こゑ絶たへて花はなみな白しろき  
ユダヤの夕ゆふべ

春はるを追おふて流ながれ行く水みづのひとすじやはぐれ  
て花はなと簀かきに落おちぬ

世を説きて泣かせまつるに堪えじと君涙は  
慣れしおの子と知らずや

醒めまさぬ君がみ頼み虹波すと濃紅うつし  
見る新戸あけぼの

毒を秘むる夏の野神が吐く息にまひるを草  
の血なくうなだるゝ

瘦せし腕にをのゝくみ胸ふれませな何いど  
ふべき我いけにえの身

青きく小僧形好きねんつむりそれよみ袈  
褌の色ふさはしき

劔を撫して壯士すぎ行く月の江偲ぶ易水の  
風寒き夕

小雨ふる夕べ渡頭に鐘くれて言の葉もなく  
君と別れたる

翠柱に散る花心ある春の宵君と奏づる流水  
の曲

君が膝ひざにうれしうたゝ寝ねの春の宵よかゝる息  
の香かほちる花はなと見し

花扇はなあふぎに夏なつを舞まふ夜の水みづの椽えんをとろ夕風ゆふかぜ君きみに  
よろしき

散ちる花はなも狂くるへる蝶ちょうも夢ゆめに似にて詩うた定さだまらぬ春  
のゆふぐれ

空そらしくもわが手に褪あせし君きみが影かげ乙女おんなのうら  
み呪のろひて秘ひめむ

君きみ戀こふる宵よ元結もとむすのふと断きれてそとろ狂くるひの  
さの亂みだれがみ

かへり路ぢの小傘こかさは重おもき雨あめの宵よ並なみて行く人ひと  
にくしと思おもひぬ

伽羅きゃらの香かほを髪かみに小傘こかさに匂におはせて紅脂べにまゆ屋や追おひ  
行く春雨はるあめ小路こうじ





秋風

天地の寂寞を傳へ來て

簷端を拂ふ物音に

長夜の夢のをどろけば

迫接る有情の秋の聲。

神人間を刑罰すべく

無弦の弓につと射たる

白羽の征矢か蕭殺の

其靜寂の活動に  
醒めつや永劫の春の酔。

今胸を刺す秋の風。

夕べ梧葉に狂ひては

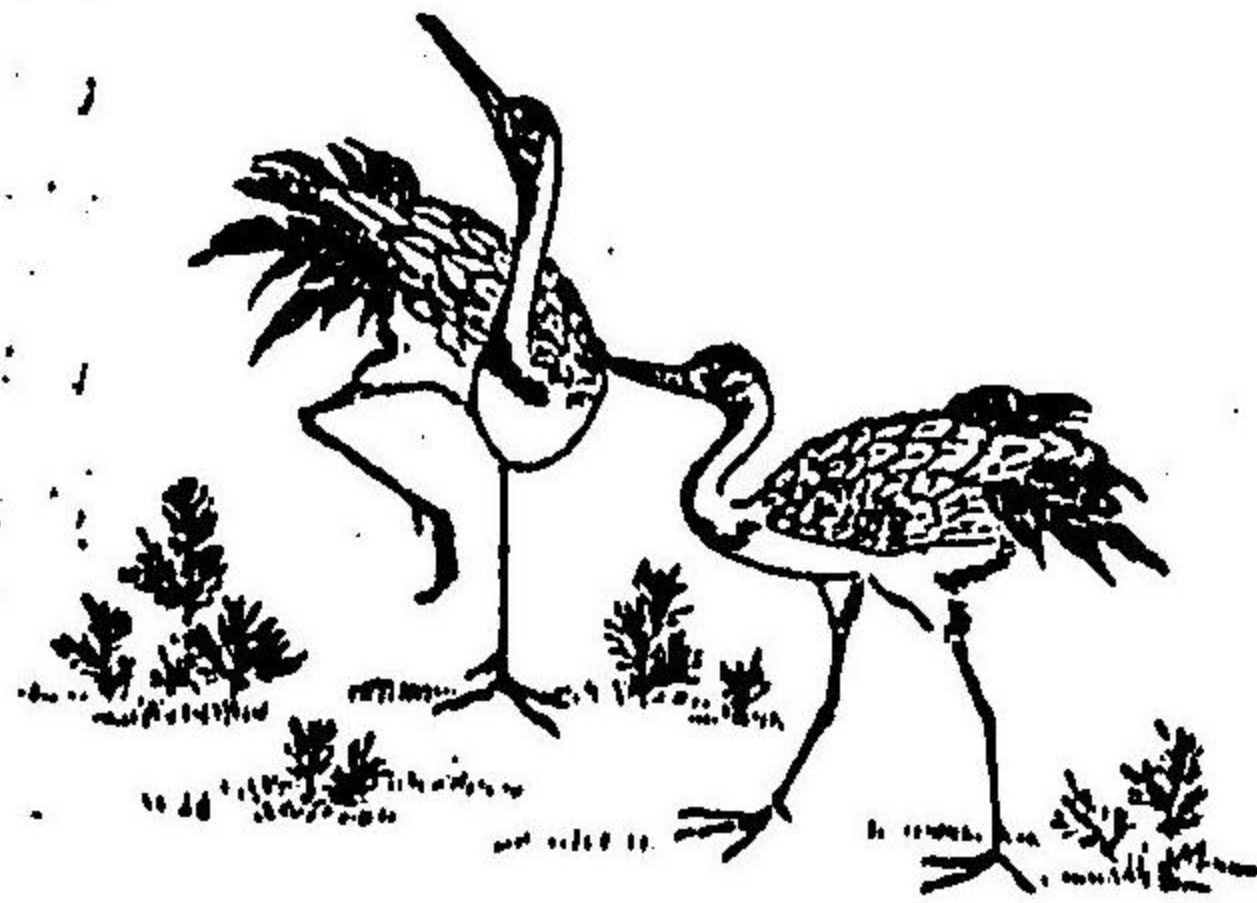
見よ搖落の権力あり

朝小草に咽びては

聞け聖哲の訓言あり。

浙瀝天に秋を舞ひ

落葉大地に哀を呼ぶ



はなぐし

かの子逝きて十八年を盆祭の夕まつりても  
見し京のはな櫛

胸に當てゝすゝり泣くべき君や起たせ見ぬ  
春七日花朽ちはてぬ

小さきくちにほゝともらしぬさゝの笑み君  
がみ指の餘りに細き

水の上をそれか杜子美の魂はゆらぐ抱くに  
此子詩興おぼゆる

君がたま我靈こめし詩の瓶を善魔淨土に葬  
らしめよ  
芙蓉髪にかざし今日など重き嫁ぎて十  
口我や人づま  
逝きし母のみ針の跡を行燈に泣かむ今宵の  
虫の音細き  
野をひろう夕闇落ちて鐘ありて今罪わけま  
す神が舞樂堂

眼りさめて院の廣庭晝しづかゆらりと  
鐘撞きをへぬ  
君を百合花に戀のため息そどかけて凝らば  
小さき星うつしまつる  
君や西に關山くれて雲行きて瘦せて枯野に  
さびし詩もなき  
詩は胸に若き李白の月の夕斗酒のおがめを  
神くだしませ

君とのみにたよらむものよ身の行衛許せし  
 人の春に泣かむか  
 み手とりて笑みて仰ぎて野に伏しぬをぼへ  
 ある夜の星流れぬる  
 下町や油のやうな春雨に男あちたき戀を語  
 るよ

聖壇

燃え立つ幕の緋揺れて  
 うちに仄めく十字架に  
 廻れる百合花の香も高う  
 靈彩仰ぐ神の堂  
 白衣の袖に額當てゝ  
 唯眼を閉じてひれ伏せば  
 神ゆ降らすバプテスマ  
 「悔ひよ！」の聲の胸に浸む。

あゝ静寂と端嚴と  
 恐れ悟りに血は冷めて  
 罪惡の子今か暗面を追ふ  
 祈念の歌の音は低く  
 聖扉より投げし花束を  
 そと渴仰の手に受けて  
 はゆる灯に打ちかざし  
 聖壇下る春の宵。

ゆめ  
 欄の夕を小百合くずれて蝶舞ひぬ夢とも見  
 ましわが二十年  
 京にいく日病める枕を花ちりてうたて清怨  
 のゆく春の夕  
 百合花をめぐるちさき希望のため息にはた  
 ちは人の天地と見る  
 失せし子のミルク流して河のべに蝶の行く  
 方をそと見守りつ

紫の二尺の袖や壇たんに落ちてみ經くづれぬ宵  
奥の院

小さくやみぬ鐘樓台に人は無くひときに  
ゆらぐさゝかにの糸

才さいは人にかざしむ神がときはごと止めよ名  
の子の其たかぶりや

加茂の森や七つきざはし手をとりにて度よ其  
たび七度なな笑みぬ

「羽衣」を舞ひし紅かちん欄まばら草生そひて夕べ五  
百年秋の雨ふる

魂たまはゆらぐ夜よるのとばりの夢のうちうちに許せ前  
髪み口くちにふれむ

江かろのみなみ嵐落ち行ゆくたそがれを笛のたゆ  
たひ有情こころの長き

君行かば北を五百里陸くわの果はにおぼせ暗くらの  
世たゝならぬ秋

姿見すがたみに泉いづみをいでし肌はだなげて百合花ゆかりと呼よび見み  
る鮎あしなる宵よや

あこがれ

詩うたに生なまれ詩うたに死しせよの境きざしかゝれ緑信りくじんの山碧みやどり

信の水

野のの夕ゆふを天あめの讚美さんびに靈呼れいこべば晚鐘ばんしょう遠く雲うな

がれよる

雲うにのする戀こひよ理想りようよ夢ゆめのごと地ちにみたす

べき大いなるのぞみ

床とこの間の梅うめの香かゆらぐ春はるの宵書院しよしょいんしづかに

春の雨はるのあめきく



花七日京へはしりし人の手にふれても見た  
きすいろの宵や  
骨朽ちて草はむす野を將軍の墓標六尺功仰  
ぎまつる  
長安の南二十里雨白く千騎聲あし江渡る  
夕  
君を露を夕べ宿さむ白梅のしばしわが世の  
春長かれな

湖添の松原三里君追ひてうなじに重きわけ  
の月見る  
君はまさず肩に鐘聞く夕まぐれ枯野を西に  
蝶追ひて行く  
血にわびて地を二百里詩魔追ふて西洛陽  
の秋に泣く哉  
手まくらのよべの我か夢唯にうれし重きま  
るまげ奥様姿

戀にもえて百合は天なる星と見るまみにう  
つすに神許しませや  
糸と細く魂誘ふ聲の起り來て涙只黒し夕暮  
の池  
母いますす門の別れのたゆたひにさらばの聲  
のあゝ低かりし  
花も散る夕べキーツの詩誦して泣りせまつ  
るによろしき春や

笠はねてかへり見すれば病む人の楯にのり  
ての聲咽びくる  
み額射し毒矢抜かむよ手はたゆう罪よと知  
りてやまむわが願  
土深く母を戀ひよる我に似るとちりし櫛を  
抱きて泣くよ  
男戀ひてお久米沈みしくつれ井を巻くか七  
巻名も知らぬ花

箱はこにいねし人形にんぎやうやなくと四よつの子の寒きこ  
の夜をそと抱き見る  
世にそねて山やまおもり居ゐの七年や今日けふも夕雲ゆふぐも  
谷いでゝ行く

ハルビンの露

(刑場の沖、横川、二氏)

『命いのちなり笑えみて冥めいせずや』  
額ぬかにひらきし御聲おんこゑに  
つと眼めをあけて見返みかへは  
あゝ東ひがしに白雲くもは行く。

脚あし下したに佇たじずむ聖僧せいそうが  
白しろき御衣おんぎに引導ひきびきの

誦文かすかに絶ゆる刹那  
命なり笑みて瞑るべし。

登るは同じ十字架と

ナザレの人を胸に呼ぶ

男子三十身は死して

名は社會に生くる幸福はあれ。

胡地の大野に日は落ちぬ

瞑路は遠し「さらば沖！」

逝かむ哉夫れ微笑みて

我輩や東土の勇士なり。

襟を正して二千里の

彼方皇帝の榮幸祝がむ

右手に劍の無き子等が

斯の死の光榮を許しませ。

架上の人よ今あそ、と  
誘りの色に僧去れば  
晚鐘野を低う渡り来て  
さすがに胸をいたましむ。

暗はむくろを包み行く  
北支那の原十清里  
風聲もなく地に泣きて  
見よ何者か血を啜る！

うれひ

君や行く江南百里秋の夕かざして舞はむ袂  
の重き

一ひらを水に任せて運命問へば底なる雲の  
花掩ひ行く

經壇に僧眠ります奥の院夕べしづかに春の  
雨ふる

小さき口にうれし添乳のたゆたひを二人笑  
まむのあゝ世もあれな

み手にしぼる神が呪ひの征矢落ちて小さく  
もえてし野の白藁

そいろ獨行く水の曲かなでては花ちる椽に  
琴の緒断ちぬ

許すべく二人がふれし柔肌のもねては神の  
戀掩ひます

水かくて小百合うつしてせくらぎてつひよ  
はかなの水泡たらずや

床の上によべのもだへの鬢のほつれやさし  
と云ひてふれむ人もなき

なか／＼に思ひ絶えよのみ言葉に一夜もだ  
へぬ君戀ふるべく

緑そは戀の若草柔肌をぬぐいませなの絹よ  
と見ませ

二人笑みて傘にさしたる君はなく破れし露  
の葉雨細う打つ

さびしさを胸にこぼるゝ白絹に火影冷たく  
人の香せまる  
地を行く子若き生命のさゆらぎに花に瘦せ  
しの春を讚めよと  
たはぶれか否運命と書きし壁に夕日淡れて  
秋暮れんとす  
君故にわが玉の緒の断ゆべきを秋に悔ある  
胸抱き給へ

愁人や薄日流るゝ柱より秋の聲をば聞きよ  
ける哉  
逢ひも得て袖かみて倚る小柱に恨みや鬢の  
香も絡らみたる  
夜の秋や榮華ながむる眼を閉ぢぬ風はなべ  
てを吹きては人に  
逝く春をめしひの母の手をとりて香のみか  
たみに花たづね行く

地に墜ちて人の子の春花も見じ祈らばや今  
を戀捨つる神

聖教を風がもてくる山莊や隠者ぶりては髯  
撫でし見る

はつ秋

きらめく劍さりと抜きて

わが柔胸に當つるごと

風冷やけき欄干の

夕べの色にをどろきて

今脱ぎかけし夏衣

何時！世に寄せし秋の寂影。

花あはたし春逝いて



夢か、夢なり青葉かけ  
 人と二人が手枕に  
 をかしと聞きし水の音  
 うの水の韻物さびて  
 何時！世に寄せし秋の聲。

暮れ行く夏日を沈む陽に  
 など力なくうなだるゝ  
 少女よひとり草堂に

染めん呪呪の筆投げて  
 「秋の生命」の長かれと  
 祈願て見まし今宵より。



深林

虚飾を忌む詩の神が  
此所を永遠なる我が領と  
壯嚴の靈集め來て  
太古の影の祟い哉。

人の子入らば犠牲たらむ  
神いかめしき宜言に

幹みきに句はひの斧き絶たへて  
青蔓あせいたずらにからみ行く。

巨人きじんと仰まぐ松檜まつひのき木

其冠そのかんざり首くびを振まはせて

天鷲てんじゆの矢やに反さ抗かひては

『斬蛇ざんたの劔けん』のひびきあり。

紅あけに紫莖むらさきくき細ほそう

姿容すがたを媚こぶる花はなもなく

立たてり六尺しやくこみどり濃縁のうゑんの

草くさこととくく雲くもを生うむ。

怪鳥くわいてうさつと舞まひ立たてば

暗やみより闇やみに夜よは白あけて

あゝ幽深ゆうしんの森もりの朝あさ

山氣さんき冷つめたく骨ほねを刺さす。



御名

にほひありと壁に額<sup>ぬか</sup>あて御名<sup>みな</sup>呼びぬ人と泣きたる夕草<sup>ゆきぐさ</sup>堂<sup>どう</sup>や

あらすべく神<sup>かみ</sup>が野<sup>の</sup>を引く白<sup>しろ</sup>き虹<sup>にじ</sup>射<sup>い</sup>てはひとみの戀<sup>こひ</sup>よみがへる

そと美<sup>み</sup>みてたびし聖花<sup>せいけ</sup>の色<sup>いろ</sup>褪<sup>し</sup>せぬ濃<sup>こ</sup>き紫<sup>むらさき</sup>のあゝたのみなき

欄<sup>らん</sup>にたゝすうつくし君<sup>きみ</sup>がみ手<sup>て</sup>たゆげ紅<sup>べに</sup>浴<sup>ゆ</sup>かします京<sup>きやう</sup>のあけぼの

冷へし君が戀のむくろの影追ふて許せ血  
 の子の夢長う説く  
 人によりて名をば求むる小さき子の胸なる  
 琴にひゞきたてしや  
 み姿と其み言葉と木がらしの其夜は胸に泣  
 くを許しませ  
 さびしらを愁ひては行く旅の子の額ごしに  
 見る二百里の雲

其名呼びて人のみ聲を戸にきゝし十日旅の  
 子信濃は國よ  
 なきがらを浪に葬りし南洋のま北二千里靈  
 雲を行く  
 花のせて春野を急ぐたび人の笠に落ち行く  
 夕鐘細き  
 魔風あれて百鬼夜行く天地や人みな死せの  
 わが咀呪哉

神のたびし戀の美酒罪の子がかはける口に  
 注ぎ注がばや  
 せめてはの思出われになからしめよつなぎ  
 とむべき玉の緒ならじ  
 月ねぼろ花みち臙我が身ねぼろ人の世臙か  
 くて消に行け  
 小きき子の大人振するまゝごとのひゝなの  
 臙に花ちりかゝる

思出の庚申塚によめ菜生ひぬつむにさびし  
 き二つの袖や  
 此世なりみ手にふれむは道の罪むしろ涙の  
 友たらせ給へ  
 袖かみて小説に泣きぬやれし窓男ごゝろの  
 われ厭はしき  
 水樓や浴衣小ろでの紅二尺ながれて落ちぬ  
 夕闇ほたる

咲きてちりて櫻流るゝせゝらぎや花のゆく  
 へに春のせて行く  
 ねん堂の壁にかきたる戀語り鐘にちる花打  
 ちては消すよ  
 灯の前に笑みて立ちます御姉の姐己に似た  
 る夕夏の椽  
 起ちも見て運命の前に涙をとす骨ある人を  
 あはれと思ひし

舞 殿

銀燭まばゆく更け渡れり  
 酒宴に酔ひし高樓に  
 君が御言に小鼓の  
 今一打に夜は明けん。

伶人樂を奏するに  
 三尺長き振の袖

嬌こやしとして力ちからなく

『榮華』一ひとさし舞まひまつる。

有心うしんかなれも世よに媚こびて

雲流くもながれよる曉あけの欄らん

なよび姿すがたの舞衣まひぎぬに

白粉しろこ溶とかす手てもたゆげ。

あゝ花散はなちりて花咲はなさきて

大君おほきみ逝ゆきぬ人去ひとこりぬ

紅欄こうらん雨あめにくづれては

まばらに生まひし青草せいそうの

夢ゆめを鎖とじて永劫えいけつに

舞殿まひでんの春はるは暮くれてけり。





その人

「花のやうに散らば」と涙いく條の頬をつたひ  
し春の夜の人

言強ひて肉を戀ひしと呼ぶ子ならば石のむ  
くろを言強ひまつれ

美しくしき人のそびらに衣かけて塑像と仰ぐ  
夕薄月夜

おくどしき人の言葉を花やぎて容れまつる  
べき女と云ふや

御手もとらぬ人の血汐のつめたさの其さび  
しみを忘れ給ふな  
倚らば脚に蹴りて笑むべき大神の立たする  
森の殿崇い哉  
姉と弟の世なればぞ斯うも呼びて力なく  
握るみ手にもあるか  
母に似ぬ血汐つめたき子生れなば泣いて許  
さじ筆持つ人と

小さう名なくうつむく草花に涙をとすウチ  
Iズヲルスに似る人あらば  
きざみても足らじの恨みひと言に罪の人よ  
と唯泣かせてよ  
もどかしやあの高潮の血に會せぬと開き給  
へな胸より胸に  
悪くらしの君と呼ばせていとらしく泣かせ  
て見たき春もある哉

土を捲いてふたゝび遣はん待たせなど三年  
 むかしの秋に去にし人  
 のたまひぬ愛しますかのたはぶれを君と生  
 き死ぬはじめとなすど  
 寂交せて襟元吹きぬ秋風の老ひし女の吐息  
 のやうに  
 散ればとてとぼそ叩きぬ逝けばとて扉たゝ  
 きぬ黄鳥櫻

花のせて春野を走る二條の水のやうなるえ  
 にしど知りぬ  
 銀杏葉や母ある里のまのごろと給びし衣に  
 秋はかくるゝ  
 胸板に流るゝ血潮拭きも見て矢面に君を追  
 ひ来しものを  
 執着は蛇のやうなる女なり見ませと来しを  
 うれしむ夜かな

小雨なれどみ傘や重く歸りますと偲びて泣  
きし子あるを思へ  
紫に明けては暮れぬ春殿の女の眉に紅梅散  
りて  
生れし日薄命の細身を捲きぬ我も罪人と申  
さば足れり

太平洋の春  
南より湧く春潮の  
時こそくれど高鳴りて  
今海底を走せ行けば  
水面にゆるき浪の音  
唯ゆたくと岸を噛む  
太平洋は春なれや。

「地よ美しくしき彩あるを

天上胡ろ寂なる』と  
愁ひて装ふ女の神の  
霞と云はじ何の氣の  
唯ゆるらくと空を這ふ  
太平洋の春を見よ。

あゝ大洋のなりに浮く  
諸多の島の島守の  
椰子の大葉の影にして

春の潮を聞く時は  
沖行く船を呼び止めて  
「彼方の大陸」と叫ばしむ。

夕べ芙蓉に落つる日を  
背方に負ひし旅人が  
朝蒼茫の春の海の  
希望の影に憧がれては  
東を遠く亞米利加の

ロツキの嶺を仰がしむ。

偉いなる哉渾圓の

あゝ空青く水青く

いづこか春の生れ来て

春や那邊に老ひて行く

それとも分かぬ大洋の

酔へるやうなる潮の音。

(完)

ちる花 (短編小説)

誰が罪

『君ちゃん、寸時掛腰あさいな』

孤寂どやうな、絹燈の淡光、主なき青蚊帳の枕を透して、火影之ゆらく涼椽にまで淡く、青葉若葉の葉摺

の風が、胸から乳房に、――

乳房うら骨隨に、キト、泌み入りて、眞、夜の氣に酔

ふたる心地、

確と許り、小さな刻みの足音が止まつて、暗裡に浮動

めく人の影姿、一妾之斯う云つて立つのであつた

『まあ、春さんでしたの、毎夕ち一人で?』

手を握るやうに近ふ進つて、兩人は、肩を並べて着坐た。

『はあ、手前一人が大好なのよ、夫れもねえ無益ない事許り考へて』

『ホ、無益ない事なんて……例の作詩なんてせう』

『ホ、夫んなど、……其かはりねね、君ちゃん云ひさして恐愕としたが、』

『頃日ね、妾、妙な事ばかり考へて居るの、それはね世の所謂クライム? 「罪」と云ふおとね、夫れは凡て男子の造るもので、道徳的に云ふ「罪人」とは、女性に對する男子の凡てを通じての代名詞じゃないでせうか? なんて』

『ホ、……の大變に難かしいのねえ、然うして御意見は何う……?』

『意見……つて、別に有りやしなくつてよ、だからね、今夜は是非君ちゃんの御考へも伺ふと思つて』

『ホ、……討論會を開かうつて云ふの』  
云ひ知らぬ可笑しさを覺えて、二人は華かな笑聲を立てた。

『妾もね、そんな事を考へないでもないけど……』  
と君ちゃん言葉は次いで、

『全く女子なんぢはね、元々優しい、それお小羊の様なの、夫れが漸々自分から魔の谷へ落ちて、身も世も忘れて、否え、忘られて了ふあんか、女子だつて悪いには違ひないんでせうけど、罪は確かよ斯く成らしめ

た男子に在るんですよねえ……』

『左うですわね、夫れが絶対に男子が悪いと云ふ譯でもないんですけど、矢張り男子がね……』

『は、何んだか妾、男子が怖ろしいと思ふわ、それだね、本當に情に脆い、情と涙とより他には何おもない直ぐ欺かれ易い乙女の心を、誘引つて置きながら蹂躪たり玩弄したりした上が、貴女、理想に叶はないからだなんて……』  
妾、余りだと思ふわ、斯んな男等にはね、本當に峻厳な社會的制裁を與へて、充分……心



から懲らしめて遣りたいと思つてよ』  
髪の毛がハラ／＼と、くづれて、君ちゃんは屹となつた。

『本當にねね……』

妾は急に續穂を失つて、其儘其所に俛首れて了うと、

『妾ね、斯んなとに諷刺たてのじやあいんだけど、既往斯んま詩を作つた事があつてよの毒にのらす其口びるに眞ありや地なる男の子を神おらしませ』  
『ホ、……』

『ホ、……』

短かき夏の夜は更けた。

當十八の夢も既早過……

花が散つて、花が咲いて、雁は行き、雁は歸つて、春

秋は三變?

其後私は、當家に嫁いで、幼い者まで養育で居る今日ふと、門を噴流して行く法界節の男女連——、其女の後影が如何にも、君ちゃんに似て居るので、走りで見送つて居ると、チラと願望た赤襟の、「奈何しても君

ちやんに相違ないツ」と思つた刹那、  
 ア、彼女が、聲自慢の唄の一節、  
 他人さ奥さんホイ……私しや、好々よ——  
 松原を遠く、縫つれて、併つて、人影は既う見はなくなつた  
 (完)

街頭の木枯

よし子

血もなき口唇に白齒する  
 老女たまく吐く息と  
 寂交せて吹く木枯や  
 都大路の夜は更けぬ

人若うして世に拗ねて  
 大隠を模す小驕慢  
 愁ひに長き髻撫で

我が黙想もくそうに沈しづむかな

連つらなる軒のきの明昏あひくれに

紅脂べにの香か絡からむ格子戸かうしどの

中うちを灯ひによる麗人たははめ此

三味みの音締ねじめを遠とほく聞きく

濁世たぐせの縁えんと眼めを閉とぢて

力ちからなく彈ひく二上ふかりや

『葦あしの假寝かりねの夢枕ゆめまくら』

身みと浪速江なみはたの捨小舟すてこぶね

引ひく人ひとなしー』と振よるはせて

絶たゆる悲調ひちやうのいとしさに

詩うた、なんすれぞ、筆折ふでをれば

高鳴たかなる風かぜの一陣ひとしほり

三筋すぢを糧かその彼かれあれば

筆を生命の我ならむ  
『苦は人生の表現ぞ』と  
端然として観ずらく。

戦友

(上)

.....(169).....  
『此品をれ食りあさい、』  
垢染みた白衣、血痕まだらに、不如意げな言葉も重く、  
怪しい、笑みを、浮べながら、牛酪臭い一片のパンと、  
一注の油液とを、枕頭に置き去つた一人の露看護手の  
後方の扉は、静かに閉ぢられて、其足音が、一歩一歩  
遠く彼方へ消えて行くと、病室は又、依然の寂寞にか  
へつて、なんとも云はれぬ、一種の、鬼氣が、頭から

脚から、

一身を圍んで、薙々とせまつて来る、

炎熱い、遼東の病舎の窓、風なき夏の夜は更けて、那  
邊ぞ、遠き砲彈の音に、臨終を絶叫ぶ、人の哀さの？

一人静かに、眼をふさいだ。

昨日までも今日までも、身は一中隊の長として、掌に  
幾百の健兒を操つた、自分も、今日、午後よりの山河  
の激戦に、思はずも、胸に敵彈の破片を貫して『ア、  
最後ッ』と、瞑目すると、既に知らず、

夢中に收容された、此病舎？

今、寢台の上に横たはつて、敵の情に生存ふる、恨み  
恨みは、なかくくに、彈丸よりも深く、骨身に通つて  
劍を握つて蹴起たも幾回？

其都度出る、胸の血汐は、潮流どながれて、又陰隈と  
倒れかゝる、現在の軀幹の『死苦にも勝る懊みを、抱  
いて、何時まで、此生耻を、つゞけんとするぞ、決然  
我から、食をば癩して、せめて彼等の手盥の食物に、  
神州男子の血潮、は製るまゝの』

と斯う思ふと、わご／＼持つて來た、枕の食物も、ど  
うして、最後の喉に通過そうぞ、固く／＼双眸を閉ぢ  
て、近く、遠く、唯一條の記憶の路を辿たのである。  
四隣は人の氣息も聞えず、鎮まり返つた夜の氣はそい  
ろ寒く、ねられぬ病軀の腦神經はますます興奮して、  
果ては、何んだか、有耶、無耶の境に落入つて、終う  
と、暮はしい故郷の山川、なつろしい戦友の儂が、  
幻のように、空中に現はれて、  
其所に影なき形を追ふ。

呀ッと呼んで眼を開く刹那!!!  
過眼矢の如く、走り去つた彼女の夢姿! 胸上に組まれ  
た、双の手は、解けて、落ちて、曉の洋燈の枕にゆら  
／＼

(中)

澄子、澄子、幽かに繰返した、  
自分の故郷は総州、木更津在、一村の名譽を、双肩に  
擔つて、萬里の征途に上ろうとする、勇士、川嶋軍曹  
と、僕との爲めに、村人は擧つて盛大な宴を張つて、

二人が光榮の途出を祝つてくれた、  
にも關はらず、僕ど、川嶋は各自、反抗の眼を見張つ  
て、此時までも、平素の反情を翻さうとも爲かつた、  
然、今夜、此袂別の席へ、酌にと侍つた村の名花！  
澄子を扣へて、最後れ、言葉を追つて見た、  
すると、彼女は故意と兩人に同盃酒を進めて、  
『さらば、此身は、結局、武功の多大い、一方の勇士  
に差上げませうよ』と、ホ、とした、  
よし、僕も男子だ、！

頼みない、女の言葉を目的に、奮然郷里を辞した、  
明日！  
自分は其後、各所に、轉戦して、美くしい餌をば求む  
る、心情の前に少なからぬ、抜群の偉功をも奏して、  
少尉から、中尉、現は中隊の上官を命ぜられて、引  
卒ゆる一團の部下の中に、噫、此者川島が服役とは  
僕は實に、渠の面姿に接する度、裂々燃ゆる、競争の  
念に、時には、下卒の渠を扣へて不道の命令を加ふる  
事もあつたが、渠はいつも、やさしく、黙從して過ぎ

たの  
 ろうだ、昨日、此戦が開かれる、少し以前だ、僕を  
 敬して遠ざけて居つた渠、川嶋の舉動は一變して、馴  
 々しく上官室に、来たかと思ふと、突如自分の、脚  
 下に、額づいて、『中尉殿ッ』と、語がはづんだ、  
 深く、何物をか、追懐するやうなふう、  
 『中尉殿ッ、彼女件は、既に、閣下に、讓捧げて、  
 居りまする私、恐れながら、同郷の御交宜を以て、斷  
 然、國家の爲、君主の御爲、それを光明に、生死を共

になし下さらば、下卒の喜びは、如何許りでせう、  
 『ど、云はせも果てず、自分の川嶋の、双手を握  
 つて、『軍曹』ど、ばかりの  
 臆、漠々たる、功名の野、否、淺間しい、功名の野  
 に、疾驅した、僕等兩人、何とは知らず、偉大なる、  
 靈斧に打たれて、寸時、無言に、空を仰いで居ると、  
 同時、耳朶にする敵の來襲……、手をとりに合ふて立  
 ちあがつて、相並んで進む知死期の路、  
 二人打たれ、一人たふれ、かへり見れば僅、十有餘、



「君」と呼べば、「閣下」と、答ふ、  
迅雷、力をこめた弾が、今草群に、落ちたと、思ふと  
サツと、ほどばしる、紅血、肉魂、碎けて、散つて、  
軍曹やいづく、  
自分は其所に撞と倒れた。

(下)

夢のやうな、我身の上、.....  
今宵、故郷の澄さんの夢魂は、何所、誰人を迎るであ  
ろう、もし、もしもだ、此身の重傷が幸運になほつて

再び故郷のふところに、相容れられる事があつても、  
あゝあの崇高い、澄さんの心に、どうして、  
可哀な川嶋を措いて、自分の前に、緑の黒髪を結改も  
のぞ！  
解し得矣、  
澄さんが、彼の時の言葉は、單に兩人を精勵まさうと  
しての、手段に出たもの、此惨憺の二人の報知が、彼  
れ村人の胸を打つ時の、其村人の一員の澄さんは、き  
つと、無形の川島が忠魂に對つて、無形の結婚を約す

ると共に、如何に、生存た僕身を嘲笑であらう、  
病苦に、心痛に、一夜を悶えた夜は明けはなれて、疲  
れた、頭の恍惚とすると、「何ッ残念なッ」  
あゝ、隣室には、同じ非運な、戦友も居る

(完)

野の女

(牧野)

夢！と、思ふと、もう、夜が明けて居るので、急いで  
床を眺ね起きて見ると、毎日ながら、なつかしい、小  
羊の聲が聞へる、起きよと、私を促すであろう。  
冷たい、曉の露を踏んで、眠げな花の香に酔ふて、小  
川を渡つて、丘を越へて、斯くして行く一里の郊原の  
少女の職分、そう、今日も亦、二つと同所に、其所に  
楽しい、終日の光陰を語り盡くそうよ。

静徐、手綱をとつて、小舎を出た、  
 花の上吹く、なよ風に、凝りし川汐の音なく溶け行く  
 ような春の野、高いく、蒼穹を仰いで、其儘馴れた  
 手枕の、私は、土にゴロリとあつた、  
 淙々音して、行く彼方の流水に、二つは水を求めて、  
 走つたのであろう、見渡す、こゝには、もう影も見え  
 ない、  
 斯くして、はるか、雲の流を眺めて、恍惚とすると、  
 丁度く、宏やかな、華やかさ、天帝の樂園の、羅衣の

ような搖檻の中で、一種なつかしい、子守の謳を聞く  
 かのやう、  
 眼瞼は次第に.....  
 美しい夢にと、入つた、白露が、ポトリ、思はず悚  
 然として、眼を開けると、いつ、此所に、.....二つ  
 は笑ましげに私の身体を廻つて居るので、  
 かつて、喘ぎよつた、流の水、それが今、其柔毛から  
 ホロリと、振はれて、落ち散つた、淨らな玉.....  
 私はあれを、排ふに堪えぬ、匂ひ高き堇を手折つて、

それを其儘花へと受けて、ア、春の日を三個の影此天地には云ひ知らぬ平和の氣が満ちく居るのである、私は例の、唄をうたつた、

此野邊にして永劫に

幸あるものか、羊飼

と、眉あげて見る、西の空に、美しい、夕榮の雲を排して清朗げな神の御聲、『此人の世をどうする』と、私の勉め、羊飼、人の賤しと、笑ふでせうが、私の身には、是より他に職がない、でせう、それく定まつた

目的に進對つて激しい、つとめに働く人は多いが、けれ共、美しい、優しい、崇い、而かも、いとしい、業が他にあるでせうか、否々私の天職！羊飼、斯業はもう、人生には、ありとも認めぬ、宏いとさろ狭いとさろ、世界の、幾億の人等が、富貴の前に、金錢の前に、肉体を賣つて、貞操を賣つて、そうして、それが人生の職分、.....  
嗟呼、何も無い、たゞ、私はあの、つとめが戀しい、よし、現實の人間が、やさしい、口から、人の世の戀